国際化推進委員会　長崎県小値賀町視察

委 員 長　　内藤　靖　　(㈱テラクリエーション)

日　時：平成 24 年 8 月 24 日（金）～26 日（日）
場　所：長崎県小値賀町

国際化推進委員会（委員長　内藤　靖）では、「アジアを中心とした外国人観光客の誘致」をテーマに活動を展開しているが、今後の活動のヒントを探るべく、体験型観光の先進地として脚光を浴びている長崎県小値賀町を視察した。

長崎県小値賀町は、五島列島の北、西海に浮かぶ 17 の島々からなる町で、島ぐるみのおもてなしで国内のみならず、外国人観光客からも高い評価を受けている。特にインバウンド事業において、最も注目すべき成果は「アメリカの民間教育団体『ＰＴＰ（ピープル　トゥ　ピーピル）〔※〕』による国際親善大使派遣プログラムが大成功をおさめ、2 年連続で「世界一」の評価を得たことである。参加者アンケートでは、「こんなに親身になってお世話をしてもらったのははじめて」「小値賀での時間を生涯絶対に忘れない」などの高評価が多く寄せられた。

〔※〕アメリカの国際修学旅行「ＰＴＰ（ピープル　トゥ　ピープル）」とは、アイゼンハワー大統領が設立した団体で国際親善旅行による世界平和への貢献を目指している。設立以来、歴代アメリカ大統領が名誉議長に就任するなど、由緒ある団体。ＰＴＰでは、毎年２万人を超えるアメリカの学生大使を世界各地（約 50 コース）に派遣している。

【行程】

1 日目（8 月 24 日（金））

12：05　羽田空港発→13：55　長崎空港着→14：30　長崎空港発→16：00　佐世保港着→16：40　佐世保港発（高速船）→18：40　小値賀島着→19：30　古民家レストラン「藤松」で意見交換会〔※１〕→古民家（一棟貸切）ステイ〔※２〕

2 日目（8 月 25 日（土））

8：30　小値賀島～野崎島（船 30 分）→9：00　野崎島ガイドツアー〔※３〕→12：30 野崎島～小値賀島→13：00　港町の食堂にて昼食→14：00　小値賀島ガイドツアー〔※４〕→16：00　高砂樹史氏（体験型観光を事業化した第一人者）の講話〔※５〕→18：30　地元の一般の民家で夕食、島民との交流〔※６〕→21：00　古民家に宿泊

3 日目（8 月 26 日（土））

9：30　ポットポール見学〔※７〕→10：50　小値賀島発（高速船）→12：40　佐世保港着→14：00　佐世保港発→15：30　長崎空港着→16：10　長崎空港発→17：55　羽田空港着

1 日目

〔※１〕古民家レストラン「藤松」にて地元の方との意見交換会

古民家レストラン「藤松」は、捕鯨・酒造りで富を築いた島屈指の大商人であった藤松家のお屋敷を改修したレストラン。入口の格子戸をくぐると、正面には全長 7 メートルの 1 枚板のテーブル席があり、ホールの吹き抜けの空間には、築 160 年を越える歴史を刻んだ柱や梁が支えている。当日は NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会（1）の尼崎　豊理事長と㈱小値賀観光まちづくり公社（2）の小辻隆治郎代表取締役社長と意見交換会を行い小値賀町の観光、歴史、産業についてお話をうかがった。

（1）NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会…2007 年設立。事業内容はおぢかの観光・ツーリズム全般。島の観光相談・インフォメーションに始まり、要望に応じてさまざまなパーツを自由に組み合わせて「オリジナルの島滞在プラン」を作成している。さらに当日の受付・料金の支払いまで、一貫して行うシステム（観光プラットフォーム）が確立している。

（2）㈱小値賀観光まちづくり公社…2009 年設立。「大人の旅人」を迎えるべく、古民家ステイ・古民家レストランなどを核とした観光まちづくり事業をスタートさせた。空き家となった古民家を、ステイ（宿泊体験施設）やレストランとして美しく再生。同社は島の文化・自然・景観などを未来に残し伝え、新たな雇用を創出し、町全体が活性化することを目指し、活動を展開している。

〔※２〕古民家ステイ（一棟貸切）

米国メリーランド州生まれの東洋文化研究者で「YOKOSO！JAPAN 大使」（観光庁）であるアレックス・カー氏は、「小値賀は、どことなく神秘的。あたらしい旅を創り出すには、ありのままの風景とやる気のある地元の人々が不可欠です。小値賀にはその両方があります。」と高く評価した。アレックス・カー氏は、NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会、㈱小値賀観光まちづくり公社、地元の方々と連携し、今まで誰も試みていない新しい旅のスタイルに取り組み、島の活性化を目指す冒険的な企画に踏み出した。それは、古い民家に現代的な工夫を加えて改装し、昔の暮らしを尊敬しながら、今の視点で世界の人を魅了できる美しく快適な家にすることであった。専門家に加え、地元の大工、左官職人など、すばらしい技術を持った多くの人が協力し実現した。視察参加者らは、古（いにしえ）の美しさに快適性が加えられた古民家で、ゆったりとした「上質な島時間」を味わった。

2 日目

〔※３〕野崎島ガイドツアー

野崎島は南北約 6.5 キロメートル、東西約 2 キロメートルと比較的大きく、小値賀島からは東に、船で約 30 分の島である。かつて島には三集落があり、600 人前後の人々が暮らしていたが、現在は宿泊施設の管理関係者以外、ほぼ無人状態となっている。廃墟を見ても、かつてここに住民がいたとは思えないほど静寂に包まれていた。かつては、小値賀島と同じように人々が暮らす集落があり、自給自足の幸せな営みが存在したそうである。しかし、時代の流れとともに人口流出は続き、平成 13 年、当時最後の住民であった島の神社の宮司の離村によって人の営みの灯が消えたのである。

山深い地形の野崎島には豊かな自然が残されており、全島が西海国立公園に指定されており、島内全域には 400 頭以上の野生のニホンシカが生息し、自然のままの姿を観察することができる。

東洋文化研究者のアレックス・カー氏が、この島を「奇跡の島」といったのもうなずける。またしばらくの間、思わず立ちつくしてしまう美しさがこの島にはあった。ノスタルジックという言葉では、到底おさまりきれない景色がこの島にはある。この島はまるで訪れる人に、「『本当の豊かさ』とは？」「『生きる』とは？」という大きな問いかけを与えているようだった。

【島には 400 頭の野生のシカが生息する】

【野首海岸：果てしなく続くコバルトブルーの海と 400mの白い砂浜】

【軍艦を思わせる『軍艦瀬』】

【旧野首教会】

1908 年（明治 41 年）、教会建築の名工・鉄川与助氏によって設計・施工された教会。当時島に三つあった集落のうち、二つは隠れキリスタンの集落であった。旧野首教会は、厳しい弾圧を受けながらも信仰を守り抜き、長年の苦難を耐え抜いて信仰の自由を手に入れた人々の象徴的建造物である。

互いに助け合い衣食を切り詰めながら懸命に働き資金を調達し、夢を成し遂げ建設された教会は、その歴史的建築的価値を後世に伝えるために、小値賀町によって全面修復され、平成元年に長崎県指定有形文化財に指定された。また、平成 19 年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」としてユネスコの世界遺産暫定リストに追加された。

〔※４〕小値賀島ガイドツアー

【赤浜海岸】

通常、砂浜は白色であるが、ここは火山島ならではの赤色。火山岩の砂れきでできた、全国的にみても、とても珍しい赤い砂浜海岸。

小値賀島は、海底火山の溶岩が流れて創り出された島で、なだらかな地形は、耕作に適し、また遠浅の海は極めて良好な漁場である。

【地の神島神社】

鳥居は「鎮真鳥居」と呼ばれ、旧平戸藩領内にだけ建てられたもの。海に向かって立つ鳥居を抜けると、正面に野崎島の「沖の神嶋神社」を望むことができる。

【五両だき：幾万年の海蝕によってできた奇景】

〔※５〕高砂樹史氏（体験型観光を事業化した第一人者）の講話

高砂樹史氏は、昭和 40 年の大阪生まれ。「わらび座」という劇団で、10 年間にわたる劇団生活を経て、第一子誕生を契機に田舎暮らしをはじめ、2005 年に小値賀町へ家族で移住。島では自宅を建築し、田畑を耕しながら、半自給自足の生活を目指しつつ、観光まちづくりによる雇用創出、少子高齢化、「都会と島の共生」に挑戦中。家族は妻と娘三人。現在は㈱小値賀観光まちづくり公社、NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会の専務取締役を務める。

高砂氏は、「本当の豊かさ」「生きる力」をもとめて小値賀町に移住した。しかし、そこには小さな島であるが故に抱えている問題が山積していた。全国でもトップクラスの人口減少率や高齢化率に加え、10 年で子どもの数が三分の一になるという極端な少子化。他方、アンケートの結果では中学生の三人に一人が「卒業しても家業を継いで島に残りたい」、都会で働いている 30 代の島の出身者のほとんどが「いつかは島に帰り、子どもを島で育てたい」と思っていることがわかった。しかし「仕事がないので帰れない」というのが現実。そこで、「観光を産業にして外貨を稼ぎ、若者の雇用を創り出す」というミッションのもと 2007 年に、思いを共有する仲間たちと、観光関連３組織（観光協会、民泊団体、自然学校）を合併させ、新たに「NPO 法人おぢかアイランドツーリズム協会」を設立した。島の「ワンストップ窓口」いわゆる「観光プラットフォーム」の確立に成功した。

高砂氏の事業のコンセプトは、「離島の魅力」に焦点をあてた新しい体験型観光、エコツーリズムによって、人口 2,800 人の小さな島から、都会の人には「心の豊かさ」「生きる力」「癒し」を提供し、一方で、島には「都会の経済的活力」を導入するという『共感共生型事業』である。

高砂氏は、当時を振り返り、「事業を開始した時は、島民からは島が荒らされるなどの反対意見が多く、心が折れそうになったこともあったが、『貫くのはコンセプト』という強い信念のもと前に進んでいった。たとえ 51 対 49 でもいい、必ず成功させるという気持ちで努力した。」と語った。また次のように続けた。「事業が軌道に乗ってくると、各方面から注目され、甘いプロジェクトの誘いも相当あったが、コンセプトに合わないものは、全て断った。」高砂氏のブレのない力強さをその言葉から感じることができた。

今では、高砂氏が中心となって起こした事業は、たった 2800 人の島に、アメリカや首都圏など世界中からやってくる宿泊客は 1 万人を超え、観光総収入は 2 億円を超えるまでに成長し、現在もなお、成長を続けている。

〔※６〕地元の一般の民家で夕食、島民との交流

小値賀島観光で、最も人気の滞在スタイルが、「民泊体験」。「民泊」とは、島の民家に宿泊するいわゆるホームステイ。現在、島の約 50 軒の家庭が「民泊」を行っている。職業も、漁師、農家とさまざま。

今回の視察では、夕食のみを民家でいただくいわゆる「ぷち民家体験」をさせていただいた。食卓には、島でとれた新鮮な魚や野菜が所狭しと並べられ、また島民のご夫妻も、まるで親戚が遊びにきたかのように自然に迎えていただいた。「どこからきたと？」「もっと食べんねー」と、ご夫妻の対応はまるで家族そのものといった印象。視察参加者は、島民の飾らぬ温かい人柄に触れることができ、忘れ難い思い出を得ることが出来た。

３日目

〔※７〕ポットポール見学

玄武岩の裂け目、深さ３ｍ口径２ｍの穴に直径５０ｃｍの玉石が眠っている。長い間、波が噛むときに動転を繰り返し現在の姿となった。まさに自然が生んだ奇跡である。

編集後記

今回の視察は、3 日間のうち、1 日目と 3 日目のほとんどが移動と、かなりタイトなスケジュールであったが、なぜだか不思議と「ゆったりとした上質な時間を過ごすことができた」というのが印象である。旅人には「心の豊かさ」「生きる力」「癒し」を提供するという高砂氏の観光のコンセプトは、この島には浸透していた。昔から残るありのままの大自然、飾り気のなく人なつこい島民の人柄に触れ、多くの人が「こころにのこる島」と絶賛していることが理解できた。今回の視察がとちぎの観光活性化の一つの指針となることを期待するところである。